

【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名 富山県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	小矢部市立大谷中学校					教員数
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	18
学級数	2	2	3	1	8	
生徒数	65	80	83	1	229	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本と自ら学び自ら考える力を身に付け、主体的に追究する生徒の育成

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

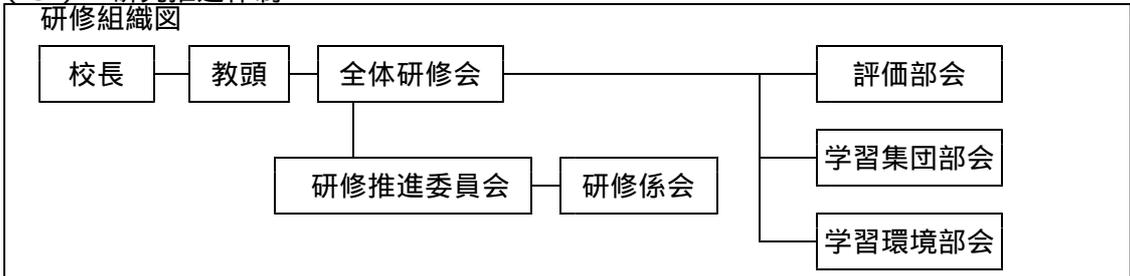
- ・ 少人数指導（2年国語、数学、英語）
 多人数学級（40人）であり、生徒の理解に差が出やすい教科であるため。
- ・ ティームティーチング（1年数学、理科、英語 2年理科）
 1、2年理科 実験等のグループ指導に教育効果を上げるため。
 1年数学、英語 入学時に生徒の理解の差が出やすい教科であるため。
- ・ 評価を生かした指導、学習習慣の定着や生活体験を生かした指導（全学年全教科）
 全教職員で主題解明に取り組むため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 基礎・基本と自ら学び自ら考える力を身に付け、主体的に追究する生徒の育成 研究の見通し（仮説） 自分で考え、調べ、発表する学習過程を工夫すること。 指導目標や評価の観点を明確にし、補充学習や発展学習など評価を生かした指導を工夫すること。 少人数指導やティームティーチング、グループ学習など指導体制や学習形態を工夫すること。 家庭・地域と連携して学びの機会や家庭学習を充実させ、家庭や地域での生活を生かした指導を工夫すること。 上記～によって、学ぶ意欲が高まり主体的に追究するようになり、基礎的・基本的内容や自ら学び自ら考える力が身に付くと考える。</p> <p>研究の内容・方法 (1) 研究の内容 自分で考え、調べ、発表する場のある学習過程の工夫（課題設定の工夫、学習形態の多様化、実験・実習・操作活動・発表活動の設定） 評価を生かした指導の工夫（生徒への評価規準・基準の提示、評価計画の作成、評価を基にした補充学習・繰り返し学習・質問教室） 指導体制や指導方法の工夫（少人数指導とティームティーチングの実施、グループ学習など学習形態の多様化） 学校・家庭・地域連携による学習習慣づくり、家庭学習や生活体験を生かした指導の工夫（朝の読書、資格検定等の受検推奨、宿題を生かした授業展開、帰りの会での明日の持ち物や宿題の確認）</p> <p>(2) 研究の方法 研修部会を中心に互見授業を実施し、実証的に仮説を検証する。互見授業は、全教職員が行い、その都度、授業研究会を行う。 教育事務所、図書館、大学など外部から指導を受ける機会を設け、先進校訪問研修や先進校の資料収集により、研修内容や方法を見直す。 県中教研学力調査、標準テスト（NRT）を分析し、生徒の実態、学力の定着状況を把握する。 学力向上フロンティア事業の実施状況を家庭や地域、周辺の学校に説明する。</p>
--------	--

平成16年度	<p>テーマ 平成15年度と同じ「基礎・基本と自ら学び自ら考える力を身に付け、主体的に追究する生徒の育成」 研究の見通し 平成15年度と同じ 研究の内容・方法 平成15年度と同じ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大谷小学校との連携強化、家庭や地域への研究内容の周知に努める。 ・ 平成15年度との比較により、生徒の変容を把握する。 ・ 研究発表会（11月実施予定）
--------	--

(3) 研究推進体制



- 研修を計画的かつ効率的に進めるために全体研修会、研修推進委員会、研修係会、三つの研修部会（評価部会、学習集団部会、学習環境部会）を設ける。
- ・全体研修会では、全教職員の共通理解、研修内容の組織化などを行う。
 - ・研修推進委員会では、研修推進に関する基本的事項について協議する。
 - ・研修係会では、研修推進委員会に提案する案件の検討、研修部会間の調整を行う。
 - ・研修部会では、研修内容を分担し、主として担当する研修を実施する。

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

1 授業等の状況

- (1) 目標の明確化と評価を生かした指導による効果と問題点
- ・ステップの細かな指導や個別指導の多い授業が増えた。そのため、時間不足になる場合もあり、グループ学習やペア学習を活用する必要がある。
 - ・学期末の総括的評価に基づき、長期休業中に補充の必要な生徒を対象に質問教室を開設した。自発的な参加者も多く、今後も継続していきたい。
- (2) 少人数指導やチームティーチングによる効果と問題点
- ・少人数指導には、目が届きやすいという面のほか、生徒が発表しやすいという利点もあり、表現力の育成という点でも効果的であると考えられる。
 - ・グループ編成は、固定せず、指導内容等により柔軟に工夫すべきである。概して数学では習熟度別、国語や英語では等質のグループ編成が効果的である。
- (3) 学習習慣の定着のための指導、生活体験と関連した授業展開による効果と問題点
- ・明日の授業に必要な用具、家庭学習の内容を、帰りの会で学級担任と生徒が確認し合うようにした。学習習慣の定着を図る上で有効であった。
 - ・家庭生活での体験や、家庭学習を基に展開する授業を行った。学習意欲を高める上で有効であり、家庭学習の習慣づけの面から、今後も重視していきたい。
- (4) 大谷小学校・家庭・地域と連携した学力向上のための方策による効果と問題点
- ・大谷小学校と相互に7回の研修会、発表会に参加しあった。小学校の学習習慣を身に付ける指導、全校挙げての研究体制などが参考になった。該当学年の学習履歴を踏まえた指導を行うなど一層の連携が必要である。
 - ・保護者に対して、授業参観2回（4月、1月）、授業公開2回（12月、1月）、フロンティア事業説明会1回（1月）を実施した。授業参観に際しては、保護者による評価を実施した。指導や運営の改善に有効であることがわかった。
 - ・家庭、地域に対しては、学校だより、PTAだよりで説明したが、断片的であり周知したとは言えない。学校だよりの特集を組むなど充実させていく必要がある。

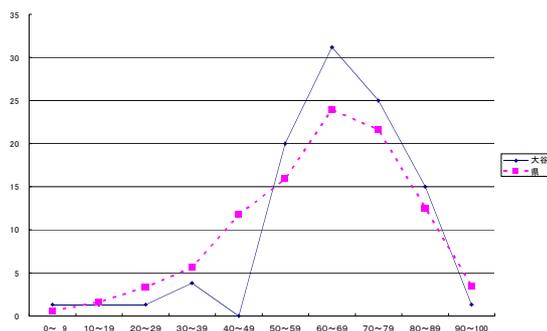
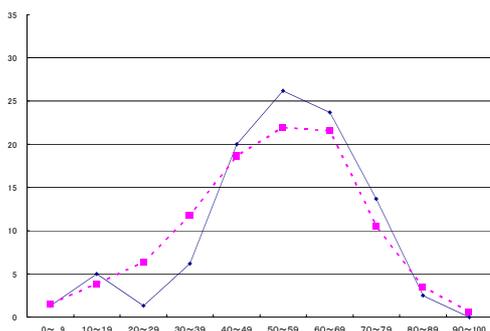
2 少人数指導やチームティーチングを受けている生徒の状況

(1) 県中教研学力調査の分析から

2年生国語（4月実施）

2年生国語（11月実施）

（縦軸 人数比 横軸 得点 実線が本校の分布 破線が県の分布）



グラフから、得点の下位層の割合が減っている様子が見える。しかし、数学、英語からは顕著な変化はまだ表れていない。

(2) 標準テスト（NRT 2年国語、数学、英語）の結果分析から

全国通過率との比較

国語：大きな落ち込みはないが、「効果的な話題を選んで話すこと」「書く材料の収集、吟味、検討」「文の構造について理解する」といった内容が弱い。

数学：「空間図形と図形の面積・体積」が落ち込んでいる。

英語：大きな落ち込みはないが、「強制や区切りに注意して話すこと」「英文を正しく読みとること」「基本的な単語や英文を書くこと」といった内容がやや弱いという結果が出た。

授業では、以上の結果から、生徒の弱点を念頭に指導に取り組むことができた。

(3) 教科学習への「やる気」の自己評価(意欲的にとりくみましたか)の分析から
 A:よくあてはまる B ややあてはまる C あまりあてはまらない D まったくあてはまらない (単位%)

	2年国語		2年英語		2年数学		1年数学		2年理科		1年理科	
	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期
A	24	25	45	44	50	34	48	38	44	44	38	37
B	44	64	38	43	34	50	46	46	39	43	52	40
C	19	10	12	13	15	15	5	15	12	13	10	22
D	3	1	5	0	1	1	1	1	5	0	0	1
	少人数指導						ティームティーチング					

<国語>

- ・1学期と2学期とでは学習する分野が異なるため比較することは難しいが、生徒は少人数での授業を希望している。
- ・一人一人に目が行き届き、支援しやすい。また、生徒も教師に対して質問しやすい。

<英語>

- ・支援講師の援助もあり、表現力が不足している生徒への対応を迅速に行うことができた。一人一人に目が行き届き、発表の機会が増えた。

<数学>

- ・自己評価の時期や学習内容の違いによって大きく影響が出るため教師の実感と異なるが、より個に応じた指導ができた。例えば、評価カードに朱書きを入れたり、ノートを点検したりして、個々のつまづきを指導できた。

<理科>

- ・全体としては理解不足の生徒が明確になり、意図的に支援する場面が増えた。

3 各種資格取得検定受検者数の分析から

- ・受検者の推移(全校生徒 平成14年度 258名 平成15年度 229名)
 漢字検定 143人(平成14年度) 216人(平成15年度)
 英語検定 76人(平成14年度) 83人(平成15年度)
 授業で身に付いたことが自分自身の能力としてどのように客観的に位置づけられるかということを試したいと考える生徒が増えている。

2. 今後の課題

基本的に本年度の研究を継続するが、次の諸点に配慮して取り組む必要がある。

- (1) 平成15年度と平成16年度の比較により成果の確認を行う研修
 県中教研学力調査、標準テスト(NRT)、通知票の評価の観点「ABC」の人数変化、生徒の各教科学習への意欲についての自己評価、各種資格検定の受検者数、読書量、特定個人の学習状況。
- (2) 大谷小学校との連携による研究推進(推進体制の確立など)
- (3) 家庭や地域への研究状況の周知
- (4) 学習室の活用、円滑な日課運営

学力把握のための学校としての取組

生徒の学習状況の推移を把握するため通知票の評価の観点「A、B、C」の人数の変化を毎学期集計する。

標準テスト、学力調査の分析

A全国的な学力と比較するためNRTを7月に実施した。

I県平均との比較や各分野の分析により、半年間の学習状況の推移を把握したりするため1学期と2学期の中教研学力調査を分析した。

生徒の自己評価の変化の把握

- ・生徒の学習意欲の推移を把握するため自己評価を毎学期末に実施した。

各種資格検定の受検者数や地域行事への参加数の推移の把握

- ・多様な学習活動への意欲向上を把握するため、英語検定など各種検定受検者数、コンクールへの応募者数、地域行事への参加者数の推移を調べた。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・要請訪問研修 1月15日(木) 市内の中学校と福野中学校、大谷小学校教員、本校教員で少人数指導について授業研究と、15年度の取り組みについて意見交換を行う。
- ・保護者説明会・授業参観 1月25日(日) 15年度の取り組みについて説明する。
- ・学校だより、PTAだよりを通じての説明

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校
- 【学校規模】 7～9学級
- 【指導体制】 少人数指導 T Tによる指導
 その他(グループ別学習)
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有